



真野地区には3つの酒蔵があり、1983年に共同で「アルコール共和国」の独立を宣言。酒造見学などで観光客に喜ばれている。

独自の自然・歴史・文化資源を持つ島

約280kmに及ぶ海岸線、東京23区の1.5倍の面積を持つ佐渡は、沖繩本島に次ぐ大きな島だ。島の大部分は国定公園や県立自然公園に指定され、国際保護島トキが日本で最後まで生息していたように、豊かで美しい自然環境に恵まれている。

歴史も古く、8世紀頃から本土との交流が始まるとも



徳川300年の財政を支え、発掘後約400年にもわたって採掘が行われた佐渡金山。今は展示資料館になっており、「宗太夫抗」などで、昔の坑道跡や採掘の様子が見られる。

に、伊豆や隠岐とともに遠流の島と定められ、様々な人や文化が入ってきた。また、佐渡と言えは金山というように、古くから金や銀の産出地として知られ、最盛期の17世紀初めには世界一と言われるほどの金産出量を誇った。

文化的にも、離島ゆえの特性を持つ。島の人々は古くから島外からの多くの人々との交流を通して、島本来の伝統文化と融合させながら、佐渡独特の多様な生活、習慣等を育むとともに、人形芝居、鬼太鼓、能・狂言などの伝統芸能を絶やすことなく受け継いできた。まさに佐渡は、自然、歴史、文化において魅力的で独自の地域資源を持つ島なのだ。

そんな佐渡も観光面では苦戦が続いている。ピーク時(1991年)には年間宿泊観光客・入込客数は121万人を数えたが、その後は減少傾向が続き、



(上)大佐渡スカイラインは、佐渡の最高峰・金北山と妙見山を中心に、全長30キロの大パノラマコース。全島を一望出来る眺めは壮大だ。(下)新湯港と結ぶ両津港には、カーフェリーとジェットフォイルの2つが乗り入れている。ジェットフォイルは60分という短い時間で2島間を結び、快適な海の旅を味わえる。



尾畑酒造(株)常務取締役
尾畑 留美子氏

「日本一の酒を通して内外の人々と交流することで、新潟県全体に波及効果が流れたいと思っています」

04年には66万人となった。こうした状況から脱し、観光を佐渡の主要産業の一つとして振興していくことは出来るのか。その答えを探るべく現地を訪ねた。

日本一の酒を介し交流人口増加図る

「佐渡に6つある蔵元の1つで、元禄年間から続いているまま」と教えてくれたのは、真野新町の尾畑酒造(株)常務取締役

役の尾畑留美子さん。伝統を守り、今でも仕込み期間中は昔ながらの蔵人泊り込みで手作りの酒を醸し出しているという。

100余年の歴史の中から生まれるその酒は「真野鶴」。全国新酒鑑評会で6年連続の金賞受賞。連続受賞記録としては、新潟県内では最多、全国でも屈指の実力の酒だ。

「観光だけでなくビジネスでもいい。大事なことは交流人口(注)を増やすこと。それには、



全国新酒鑑評会で6年連続金賞を受賞した尾畑酒造。



個々の生産者や旅館が自らの魅力・個性を活かして頭の中にある「何か」を実行に移すこと、そして自立することが大切だ」

低迷する佐渡観光の現状を打開するには、地域の自立と実行力が不可欠と尾畑さんは言う。そして、その言葉を実行に変える。

遡ること3年前。尾畑さんは日本一の新潟の酒を海外の人にも飲んで欲しいと自力で販路を開拓し、アメリカに初輸出。以後、エールフランスの機内酒の採用に加え、出荷先を仏、独、伊、中国など8カ国に拡大した。しかも、大手商社を通すという安易なやり方を選ばず、あえて困難な独自ルートの開拓を追求した。

「商社を通せば、その先は見えなくなりですが、自力で営業すれば、現地の業者、消費者

の顔を直接見ることが出来る。お客さまの「おいしい」という言葉にダイレクトに触れることが、私たち生産者にとって何よりの自信になり、次のアクションにつながるのです」

尾畑さんには夢がある。「佐渡をイタリアのトスカナのようにすること」だ。彼の地が名産のワインをきつかけに、豊かな食材、素朴な田舎料理などの地域資源をアピールし、

街の活性化に繋がったように、日本一の酒をきつかけに、世界の人々が「佐渡の食べ物、街、自然、文化を知りたい、佐渡に行ってみよう」と思うようになつて欲しいと願うのだ。発信なくして受信はできない。まずは一歩踏み出して10年後の未来につなげることが大切だと話す。

「子どもたちが大きくなったときに、この佐渡を誇りに思ってもらえるようにしたい。そのために出来ることを、これから

も続けたいですね。今、始めないと変わりませんから」と尾畑さん。新潟県観光振興復興会

議等を通し観光を含めた地域活性化の提言を行い、その行動力は、地域の自立と元氣への確かな牽引力となっている。

地域資源で地域の自立を

相川町の伊藤赤水作品館は、佐渡の土を活かした独特の技法で知られる。館の主は、無名異焼(むみょういやく)の陶芸家で、03年に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された五代・伊藤赤水氏だ。1680年に加賀から佐渡に渡った伊藤氏の祖先が、1830年頃、無名異(佐渡で産する酸化鉄を含む赤色の粘土)を使つて楽焼を始めたのが無名異焼の始まりという。

「300余年の間、佐渡ヶ島にお世話になつて、そして今がある。地域のために出来ることを頑張りたい」

そう語る伊藤氏もまた、地域は自立しなければならぬとの立場から、機会を見つけては佐渡の未来について積極的な発言を続けている。

その基にあるのは、地域の側からアクションを起こして中央集権的な考え方を転換しなければ、佐渡はおろか日本という国自体の将来も危うい



重要無形文化財保持者 日本工芸界参与
無名異 陶芸 五代 伊藤 赤水氏

「地域に居ること、地域でモノを考えられること、地域の空気を吸えることが、自分の創り出すものに個性を与えてくれるのです」



海を望む高台にある、赤水窯の作品を展示、販売している伊藤赤水作品館。

という認識だ。

「たとえば佐渡の人は教育熱心で、島を出たら戻って来ない子どもたちのために、年間50億円位、市の年間予算の約10%に相当する額を教育投資に回している。でも、その成果が花開くのは中央。つまり、佐渡にリターンのない投資をしている。これは明らかにおかしいことです」

もちろん、長い歳月をかけて作られてきた流れは、そう簡単には変わらない。だから、伊藤氏は「まず地域の人たちが同じ方向を向かなければ、何を計画しても現実化しない」と、地域の人たちと言葉を交わしながら、佐渡の新たな展開を模索し続けているのだ。

そして今、ようやく「これから地域が自ら考えていかなければ、と皆が考え始めたという意味で、新しい人口に差しかかっているかな」と感じられるようになった。かつて、人々の日常生活の中に、この地域の将来をめぐる議論は皆無だった。それを考えると、ようやく潮目が変わり始めたと思うのだ。

着実に自立を目指し始めた佐渡。その将来を決める競争力の1つが地域資源だ。「地域固有の付加価値や個性は、グローバル競争の中でも武器にな





NPO法人しまみらい振興機構
理事兼事務局長 井上 由香氏

「佐渡はガイドブック通りに見
て回っても、それ以上の発見
がない。人づてで来たり、観光
ルートから一歩外れると、こん
なに面白い島はありません」

り得ます。陶器の世界でも、海
外とのコスト競争に勝てない量
産地では窯元の数が半減して
いますが、美術的・工芸的価値
の高いものは生き残っている。
佐渡は離島であるが故の文化
、船の寄港地としての文化
流入等、その文化は歴史的に
みても多様な側面を有してお
り、陶芸も江戸時代に金山を
擁する天領地として様々な文
化や工業技術が持ち込まれた
結果発展してきたように、佐
渡の地域資源にはハイテクリテ
ィな総合力があるし、それがこ
の地域の将来を左右すること
になるはず」と伊藤氏は言う。
観光が「そこを訪れる人の
数」ではなく、「そこで提供出
来る質」で勝負する時代とな
る中で、佐渡が地域資源の高
い付加価値を活かせるかどう
か。その成否は、地域の人々の
自立への動きにかかっていると
言える。

NPO活動を 通じ地域を 愛する人材を育成

佐渡の南玄関・小木町で佐
渡の経済的自立に向けた人づ
くりに取り組みNPO法人し
まみらい振興機構。02年9月
の設立後、地域情報教育・海



小木海岸ならではの独特の風景・たらい舟。
主に女性があやつり、ワカメ・アワビ・サザエな
どの漁に実際に使われているが、観光用にも
用意され、人気が高い。

洋自然学校・NPO活動振興
の3つの活動を軸に、次代を担
う世代が実社会との接点を持
つための機会提供を行うと共
に、自らの意思と行動で社会
的価値を創造出来る人材育
成を行っている。

「私たちの役割は、佐渡の若
者たちに島の中で生きていく
ための方法を考えてもらい、地
域は自分で創るものであるこ
とを知ってもらうこと」と語る
のは、理事兼事務局長の井上
由香さん。
たとえば情報教育では、地
域の小学校で3、6年生を対
象にした年80時間の授業を行
っている。パソコンを使い、自
分たちが生まれ育った佐渡につ

て学ぶ。パソコンを使うのは、
将来、一旦は離島することが
ほとんど、彼らが情報発信し
ていくときに不可欠なツール
であることはもちろん、情報活
用能力を育成するためだ。
「日常生活とは別の角度から
地域の課題や可能性を知って
もらうことが大事。佐渡のこ
とを知らないまま島外へ出て
しまうと、将来、島に戻りたい
と思ったときに、そこにどんな
可能性があるのか考える力を
欠いてしまう。小さい頃から、
佐渡の可能性と課題を考える

力、何かやりたいと思ったとき
に、それを実現していく技術
を養ってもらいたいのです」
井上さん自身、同機構の理
念の実践者でもある。東京で
の学生時代、佐渡を拠点に国
際的な活動を行っていた和太
鼓集団「鼓童」の存在を知り、
佐渡に興味を持った。卒業後、
当地に移り住み、鼓童のスタッ
フとして国内外の公演制作や
国際芸術祭「アース・セレブレ
ーション」の企画運営を担
当した。4年前にNPO法人
立ち上げを機に独立。佐渡に
は質が高くユニークなNPO法
人が多く、それらとのネットワ
ーク形成を図りつつ、現在は、
佐渡市総合計画審議会副会
長、学校教育基本計画策定委
員なども務め、行政とも連携
しながら佐渡の未来のために
奮闘している。

そんな井上さんの目にも、今
が新しい佐渡になるための勝
負どころと映っている。
「江戸時代の金山・銀山時代
からお奉行様あつての土地。
戦後も補助金と公共事業で
成り立ってきた島なので、その
依存体質から脱し、市民が主
役の仕組みが出来れば、観光
を含めて面白くなる。人材育
成を含めそれが出来るか否
か、今が分かれ目という気が



佐渡市長
高野 宏一郎氏
「観光振興で大事な
のは、外から人を呼ば
うとするのではなく、今あ
る佐渡を住民自らが
楽しむことで、佐渡を
誇りある島、美しい島
と認識することです」

行政と市民協働に よる島づくりへ

尾畑・伊藤・井上各氏が等
しく指摘するのが、島の自立
の必要性であり、そのための意
識改革と仕組みづくりだ。市
民との協働による島づくりを
目指す行政サイドでは、どう
考えているのだろうか。その現
状認識と今後の取り組みを知
るべく、佐渡市長の高野宏一
郎氏を訪ねた。

「問題は、観光ニーズの変化に
十分対応出来ていないこと」
高野氏は、佐渡の観光振興上
の最大の課題をそう指摘する。

バブル後も、佐渡には離島プ
ームの余韻で大勢の観光客が
押し寄せた。その中心は団体
客。受け入れ側は、それに合
わせて体制を作った。島内移動
用の貸切バス、ツアーガイド、宿
泊施設など、すべてが団体仕
様で整備された。

やがて観光に対するニーズ
が変わり、個人・小グループが
主役となった。だが、佐渡では
こうした変化への対応が遅れ
た。個人客が利用出来るバス
が少なく、目的地へアクセスし
にくい、寺社仏閣などのスポッ
トを訪れても、その歴史を語
るガイドがないなど、個人客
にとっては不便で発見のない観

光地となった。その結果、観光
地として不可欠なリピーター
も増えず、観光客全体の数が
減少し続けたのだ。

こうした状況に対して佐渡
市では、その将来像を「豊かな
自然、薫り高い文化、活気あふ
れる新しい島づくり」と定める
とともに、全国に誇ることの出
来る「島づくり」を行政と市
民が協働で創りあげていく方
針を掲げて、観光振興に取り
組んできた。各地区別に分か
れていた観光協会の一本化、
観光エリアへのシャトルバスやエ
リア内での定期路線バス・タク
シーの整備、ボランティアガイ
ドの養成、古くなった能舞台の
修復、様々な観光資源にその
歴史と文化の付加価値を加え
て磨き上げる「観光資源の物
語化」などだ。それと並行し

て、国や新潟県、県内主要都
市との広域観光での連携、修
学旅行生・外国人観光客等へ
の対応も進めている。

新しい観光ニーズに合った基
盤整備と合わせて、島民の意識
改革も急務だ。高野氏は言う。
「努力しなくても人は来ると
いう意識が根強く残り、観光
産業が持つ経済波及効果への
認識が甘く、おもてなしの心
も不十分だった。今後はベーシ
ックな部分を見直していかな
ければならない」

島民が企業家マインドを
持ち行政サイドと連携して
変革を遂げる時がきている。
手応えはあるという。「一つ
の市となつてから、皆が佐渡の
将来を本気で考えるようにな
つてきました。合併前は10市
町村がそれぞれの地域の個

性を独自にアピールするばか
りで、佐渡としてのまとまり
は弱かったのです」と、挙島体
制の確立に確信を深める。ア
ース・セレブレーション開催にお
けるワークショップの開催、市
民の声を吸い上げ行政の施策
に反映させる会議等の試みも
始まっている。

佐渡をどんな観光地にした
いか。最後に聞くと、「下キを
シンボルにしながら、アース・セ
レブレーション、国際トリアス
ロン大会などを通じて、自
然と共生出来る島、自然と
一体となった観光地を目指
したい」と高野氏は目を輝か
せた。

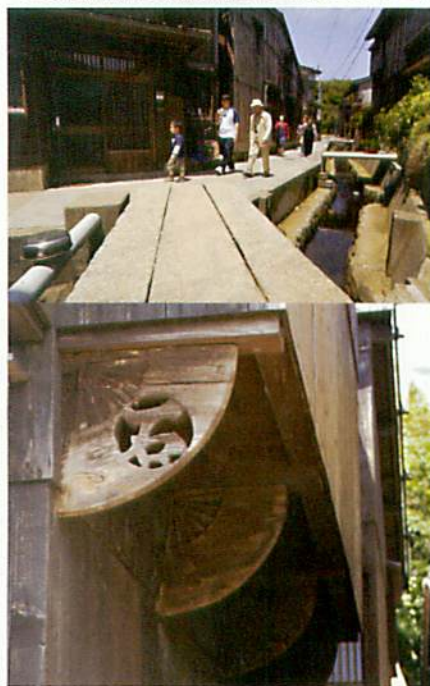
最近の日本政策投資銀行
(DBJ)新潟支店の調査レポ
ート(注4)でも、佐渡観光の発
展に向けた今後の課題として

4つの方向性(関係者の連携、
佐渡ブランドの確立、マーケテ
ィング力の強化、広域観光)を
指摘している。一島一市とな
ることで蓄積されつつある新し
い島づくりへのエネルギー。そ
れは、間違いなく本物だ。高野
氏のリーダーシップ、そして、多
くの市民リーダーの志と情熱
に期待したい。



MAP

(上) 大きな岩が互いに寄り添うところから名付けられた、
七浦海岸の夫婦岩。典型的な隆起海岸で、夫婦岩付近
は代表的な景勝地のひとつだ。(中央・下) 回船業の集
落として発展した「千石船と船大工の里」の宿根木。国
の重要伝統的建造物群保存地区にも指定されている。



(注1) 交流人口
交流人口とは、定住人口に対して、ビジネス、観光、文
化、スポーツ、買物などを目的として、その地を訪れた
人の数をいう。

(注2) アース・セレブレーション
小木地区を拠点に、国際的活動を行う和太鼓の芸術
集団「鼓童」のプロデュースによる一大音楽イベント。
88年から毎年8月に開催される。ニューヨークタイムズ
紙に日本で最先端のワールドミュージックイベントと評
されるなど、国際芸術祭として定評がある。

(注3) 国際トリアスロン大会
毎年9月、佐渡全島をコースに行われる。国内外から
集まる選手1,700人という大規模な大会で、佐渡全市
町村をあげての一大イベントとなっている。

(注4) 日本政策投資銀行(DBJ)新潟支店の
調査レポート
マーケティングから考える「佐渡観光」その1
—アンケート実施・分析編—(平成17年12月)
マーケティングから考える「佐渡観光」その2
—本編—(平成18年3月)